



おっぱいだより

6号

ゴールデンウィークも過ぎ、皆様5月病になっていませんか？忙しい日々とは思いますが、ゆっくりのんびりと過ごせる時間を作れると良いですね。

さて、今回は小田明薬剤部長に「母乳と薬剤」というタイトルでお話していただきました。母乳をあげていると「薬を飲んじゃいけないんじゃないか？」と考えてしまうお母さんも多いと思います。また医療者としては、必要以上に敏感になって「薬を飲む間は授乳はやめて下さい」というケースもあるのではないのでしょうか？

このお話を参考にして、授乳中で薬が必要な場合、医師、薬剤師、看護師、お母さん、みんなで母乳育児を続けていけるような治療を考えていけると良いなあと思います。



母乳と薬剤

薬剤部長 小田 明



授乳期の母親が疾病治療のために薬物治療を受ける場合には、「本当に必要な薬のみの投与なのか」、「母乳移行性の少ない薬なのか」、「授乳婦への使用情報が多い薬を選択しているのか」などの説明を十分に受けた上で、出来るだけ授乳を継続しながら行うことが望ましいと言われていました。

「薬の母乳中への移行性」については、薬の性質（分子量、脂溶性、蛋白結合性、pH、・・・等）や母親の疾病状態によって異なりますが、移行「しやすい」、「しにくい」はある程度予測できます。例えば、「蛋白結合性が高く」、「脂溶性が低く」、「分子量の大きな」薬を選択できれば、その薬の母乳移行量は少ないことが予測できます。

母親が服用した薬の多くは、母乳中に移行します。しかしその量は非常に少なく、母親に投与された薬物量の通常1%以下であり、「授乳を中止する程の問題にはならない」と言われています。・・・とは言っても、薬の効能によっては「授乳を避けること」と言う薬はあります。また、母乳へ移行しにくいと言っても、投与期間の長い薬の場合は、「授乳を避ける必要がある」と言う薬もあります。

それから、簡単に手に入るサプリメントといえども、その中には「授乳中は使用を避けるべきである」と言うものもありますので、気をつけなければなりません。

以上のような、「母乳移行情報」、「乳児への影響情報」はしっかり確認して、納得して病気の治療を行う必要があります。

安心して母乳育児ができて、授乳を介して母子の絆が深まっていくように、医療スタッフはしっかりサポートしていきたいと思います。

母乳育児成功のための10カ条 第5条

母親に母乳育児のやり方を教え、母親と赤ちゃんが離れることが避けられない場合でも母乳分泌を維持できるような方法を教えましょう。